
黒い翼の天使

雛乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒い翼の天使

【Nコード】

N0084G

【作者名】

雛乃

【あらすじ】

ユリナは不治の病に冒されていた。そんなとき、ユリナの前に悪魔と名乗る天使が現れる。ユリナはその悪魔に惹かれていく。しかし…

前 出逢い（前書き）

ファンタジーラブです。読んで見てください

前 出逢い

ユリナは昨夜から咳が続いていた。熱も一向に下がらない。食欲もなく、食べ物は一切受け付けられない。どれもこれも、ユリナの病気のせいだった。

仲良しの秋羅にメールを打つ。

『今日は来ないで。熱がうつってしまっから。』
愛想も何も無い文章。

でも秋羅は返事をくれる。『うん。わかった(o^_^)bお大事に!』

ケータイを投げ出すと白いシートに体を委ねる。

見舞いに来た母が置いて行ったチョコレートがはずみで落ちた。それを拾い、ついでにカレンダーをチエックした。

「もう、一年になるんだ」ここに入院してから。熱でほてった体を冷たいシートが冷ましていく。

治ることの無い病気。

ユリナは自分の病気をそう認識していた。

苦しんで死んでいく。

それが堪らなく怖かった。

「大丈夫……?」

躊躇いがちな声がする。見ると、歳はそんなに離れていないだろう少年が立っていた。

「来ないで……うつつちゃっよ」

見上げて、ハッと息を飲む。黒い、翼。背中に、大きな黒い翼が広がっている!

「し、死神!? 悪魔!? いやあああああ!」

そう叫ぼうとしたのに、声が出ない。出るのは皮膚に滲む汗、喉がひくつく音。

「恐れないで。僕は悪魔リザ……」

「悪魔!？」

殺される。嫌だ。私はまだ生きたい!

「僕は人を殺さない。居るだけ……」

翼から何枚か羽根が抜け落ちる。

「信じていいの？」

「うん」

リザが微かに微笑んだ。

「リザ。あたしね、いわゆる不治の病ってやつなの」死ぬのを待つしかない。

そういうと何だか悲しくなってきた。必死に涙を堪える。会ったばかりの人の前で泣くわけにはいかない。

「ねえ、ユリナ　泣いても、良いんだよ？」

リザがチョコレートをかじりながら優しく言った。

涙が頬を滑り落ちる。

黒い翼が私を包み込むように広がった。

「リザの翼、チョコレートの匂いする」

涙は止まり、落ち着いてからリザに言ってみる。

「そうかな。」

確かに甘くてほろ苦いチョコレートの匂いがする。

「ユリナ。僕そろそろ帰るよ」

「リザって何処に住んでるの？」

「入らずの城」

そついうと窓から飛んで行ってしまった。

「やあだ、カラスでも入ったの？」

母が黒い羽根を摘み上げて顔をしかめる。

あ、リザの羽根だ。

まあ、まさかユリナの元に悪魔が現れたとは思わないだろうけど。

リザと話してから、熱が少し下がった気がする。体のけだるさが少し取れた様だ。布団をかぶり、母に背を向けた。

「お母さん…入らずの城って知ってる？」

リザが住んでいる所。

「さあ…？何なの、それ」ファンタジー漫画の読みすぎよ、それより少しは勉強したらどう、と母が小言を言った。死んでしまっ娘によく勉強しろなんて言えるものだ。崎田ユリナの家は、秀才一家でユリナの姉も私立高校に通っている。

けれどユリナは病気で学校に行けないので母も諦めていると思っていたが…。

「じゃあ私はそろそろ帰るから」

「ん」

ぱたん、と扉が閉まる。

リザの羽根がごみ箱に捨てられていて悪魔の存在を確立していた。

リザの羽根を摘み上げ、鼻に近付ける。この香ばしい匂いは…

ココアだ。

リザの翼はチョココレートの匂いがした。ほんのり甘くてほろ苦いビターチョコレート。

リザは本当に悪魔なんだろうか。ユリナは悪魔と言うのは人を傷付けてゲラゲラ笑うとんでもない奴だと思っていた。でもリザは違う。優しい悪魔だ。言うならば黒い翼の天使だ。

「リザ…」

気付けばユリナはリザとまた会いたいと思っていた。

中 芽生え

次の日。

その日は前の日に比べ体調が良かった。喉の痛みはあったが熱はか
なり下がっている。

またリザ来ないかな、と本に挟んで隠しておいたリザの羽根を摘ん
だ。チョコアイスの匂い。毎日匂いが変わるのかな。

コンコン……。

ドアがノックされた。

リザ！？

「ヤホー、ユリナ」

秋羅だった。おっきな花束を抱えている。

何だ…。

ユリナはがっかりした。

花束を菖蒲の模様が入った花瓶に挿した。

中に菊が混じっていてユリナは顔をしかめる。

わざとじゃないから言えないけれど。

「で、お花とこれ、クリームパン！村木屋の、ユリナ好きだったよ
ね？」

と秋羅が素朴な茶色い紙袋を取り出した。中にはふんわり柔らかそ
うなクリームパンが四つ。

秋羅と二つずつ。

一口かじるととろりとクリームが溢れてくる。そうだ。リザに一つ
あげよう。

それから二人で秋羅が持ち込んだ雑誌のクロスワードパズルを解い
たり、学校の話をしたりした。

名前も忘れたクラスメイト。見たこともない教師。

しかしユリナの頭の中はリザの事でいっぱい、秋羅の弾んだ声も
雑音にしか聞こえない。

ユリナがリザの事を考えている間にも時は過ぎ、やがて秋羅はピアノのレッスンがあるとかで帰って行った。時計は3時を指していた。昨日リザが来たのは3時過ぎだから、昨日と同じ位に来るのならばそろそろ来るはずだ。そして、唐突にそれはやって来た。

夕刻の窓の外には、カラスが何羽も羽ばたいて居た。黒い大群は悪魔の集団に見えない事も無かった。

そしてそれは本当に悪魔の集団だったのだ！

大群の中の一羽がユリナの病室の窓に向かって飛んできた。

ユリナはすぐにそれがリザであると気付く。来てくれた。

リザが、来てくれた。

ユリナはすぐに窓を開け、リザを迎え入れた。

冷たい風が吹き込んできたけれど、そんなの構わなかった。リザと居られる嬉しさに比べれば。

ユリナはベッドから上半身だけを起こしている。リザはパイプ椅子に座ってユリナが渡したクリームパンを頬張っていた。

二人は殆ど喋らない。

話なんてしなくても、二人の間では何かが通じていた。

二人は似ていたのかもしれない。

孤独、と言う赤い糸で。

ユリナは恋と言うものを知らない。

秋羅はしょっちゅうあの人が好き、この人が好き、と騒いでいるが、ユリナにはイマイチピンと来なかった。

それもそのはずだ、ユリナは一年間も病室で過ごしているのだから。でも、リザと出会ってその意味を知った気がする。

一緒に居て凄く楽しい。

これが恋って事なんだ…。

後 別れ

「ねー、秋羅：恋って何？」

ユリナは鯛焼きを持ってお見舞いにきた秋羅に聞いてみた。恋多き秋羅なら当然分かるだろう。

実際秋羅はいとも簡単に答えて見せた。

「簡単だよ。恋ってのはその人の姿を見るだけでドキドキして、その人の事以外考えられなくなって、一緒に居るとホツとするものよ」
そうか。

全てユリナに当てはまっていた。

やっぱりこれは恋なんだ。でも…。

どうしてなんだろう。

まだ出会って二日目だ。

秋羅とかならまだしも、ユリナは普通の女子だ。

まさか。

ユリナの心に疑惑が生まれた。

私は恋を知らないから、異性への関心を恋だと勘違いしているのだろうか。

だとしたら、私は恋をしている訳じゃ無いのだろうか。

訳が解らなくなっていた。そんなユリナには構わず、秋羅は備え付けのポットから急須に湯を注ぎ、煎茶を煎れていた。

そして、

「そんなこと聞くなって事は、さてはユリナ、恋したね？相手どんな人よー、患者さん？」

「…お見舞いの人」

「そーかそーか！恋ってのは良いものよ！生活に艶が出て来るって感じ？」

さすが恋多き女子、秋羅。ユリナは初めて秋羅を尊敬した。

冷めかけた鯛焼きを一つかじり、秋羅が

「もしかしてこないだクリームパン残してたじゃん？その人のため？良いわよお、尽くす女性って。」
「やだあ、何言ってるの。そう言うつもりだった。けれど、言えなかった。」
「ユリナ!？」
意識が遠くなっ行って行く。

窓の中にユリナはいなかった。

リザは怪しく思い、窓をそっと引いた。

音も無く窓が開く。

誰も居ない。

病室の分厚いドアの向こうから、何か聞こえる。

リザは少しだけドアを開けた。

「ユリナあ！しっかりして！」

「302号室崎田さんの容体が急変しました！至急手術室に向かいます……」

ストレッチャーに乗せられたユリナが運ばれて行くのがドアの隙間から細く見えた。

リザの胸にズキンと痛みが走った。

手術？

不治の病だとは聞いていたけれど、そんな……。

救いたい。

救いたい。

リザは翼を開き、窓から飛び立った。

手術室の窓に向かって。

『悪魔伝説 二巻 悪魔が死を迎えるとき。
悪魔は本来人間に苦痛を与えるものである。
しかし、稀に人間に慈愛の心を持つ悪魔が存在する。正統な悪魔に
は死を迎える事は無いが、不正統な悪魔が人間の命を救った場合、
その不正統悪魔には二十四時間以内に死が訪れる。それは不正統悪
魔の運命であり、誰にも変える事は出来ない。』

手術の成功率は10%。

医師はユリナの両親にそう告げた。

母は既に顔を押しさえて泣きじゃくっている。

父の顔には表情が無かった。

ユリナの手術がそろそろ始まる。

リザは手術室の窓から中を覗いた。

数人の医師に囲まれてユリナの姿は見えなかったが、もうすぐ始まるのだとはわかった。

リザは目を閉じて口の中で呟いた。
禁断の呪文を。

手術の終わりを待ち侘びていた両親の元に明るいう知らせが届いた。
ユリナもすぐに意識が回復し、病気も完治した。
しかし、リザは現れなくなった。

あれは病気が見せた幻想だったのだろうか。

ユリナは時々そう思う。
けれど。

本に挟んだりザの羽根はそのまま残っていた。

後日。

市立病院の手術室の窓辺から、カラスの死体が発見されたらしい。
もしかしたらそれがリザなのだろうか。

ユリナはリザの羽根を窓から吹き込む風に乗せた。

リザの羽根は空に回収されていく様に舞い上がって行った。

何処までも、何処までも…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0084g/>

黒い翼の天使

2010年12月22日02時17分発行